

ブックレビュー



『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る』

～アフガンとの約束』

中村 哲 著／澤地久枝 (聞き手)

岩波書店 刊

定価 1,078円 (本体980円+税)

単行本発刊が13年前。文庫収録がおおよそ2年前。中村哲がアフガニスタン東部で殺害されてから、はや2年半になる。しかし、ウクライナ戦争が続くなか、アフガン民衆に半生を捧げた中村のメッセージが重みを増す一方だ。

ノンフィクション作家として知られる澤地久枝の食らいつくような問いに答える中村の出自や本懐が伝わる対談だ。資料を読み込み肉薄する澤地の解説が要所に添えられ、多忙を極めた中村との対話を補完している。

中村はこのインタビューで何を語ったか。医療行為の延長に井戸を掘り、灌漑用水路を開設していく経緯は広く知られる。中村の語りは穏やかだが、近・現代の日本人に対する指摘は厳しい。

○自分の身は、針で刺されても飛び上がるけれども、相手の体は槍で突いても平気だという感覚、これがなくならない限り駄目ですね。

○若い人に職がない？ とんでもない。田舎に行ってみれ！ と。あっちこちにぺんぺん草だ。私は半分外科医ですから荒療治ですが、大学を半分ぐらいつぶしてしまって、いまの自衛隊を武装解除して農村に送ったらどうですかね。それで、稲刈りとか、させてみたらいいですよ。

○アメリカがないと、日本は生きられないという錯覚が、いつの間にか国民のあいだに根をおろしてきたんですかね。

○いまのアメリカの動きや、国際的な動きを見ていると (中略)、自分と違うものをすべて、善悪だとか、優劣だとか、後れてる・進んでるというカテゴリーに分けてさばいてしまう。

○欧米人に対する卑屈なコンプレックスだけは、明治以来脈々と引き継いでいる。

米軍などの空爆下、アフガン大地を緑野に変えようと命を懸けた中村のシャイな口調に秘められた憤怒の声が耳に痛い。

さんかいの げん
(山海野 玄)